

孫權の夷洲・亶洲遠征について

手塚 隆 義

一

呉の孫權が、帝号を称した翌年、すなわち呉の黄竜二年（二三〇）に、衛温と諸葛直とに一万の兵を授けて海に浮んで夷洲ならびに亶洲を探らせたと、三国志・呉志の彼の伝にみえ、同書の陸遜と全琮の伝には、權が遠征に先だって兩人に其の可否を諮問したと、それに対するそれぞれの上疏が載っている。

結局、この遠征は孫權が、遜・琮の反対を押し切って行ひはしたものの、夷洲に達して僅かに土人数千人を虜にしたにとどまって、亶洲には所在絶遠で到ることができず、疾疫のために十中八・九に及ぶ兵員を失って、翌年帰還したものの、温・直の二将は詔に違ひ功無きの罪に坐して下獄し誅せられる、という慘憺たる結果におわたったのである。

孫權が、この遠征を敢行した目的は、諮問に対する陸遜の上疏中に

いま兵を興してより歴年、見衆損滅せり。陛下、聖慮を優勞して寝と食とを忘れ、將に遠く夷洲を規りて、以て大事を定めんとす

とか

(239) また珠崖は絶險にして、民は禽獸のごとし。その民を得るとも事を済すに足らじ

とあり、全琮のそれにも

往く者は反ること能はざるを懼る、獲るところ何ぞ多きを致すべきや

などとあって、すくなくとも表面的には、多数の土人を虜として伴ひ還つて、魏に対する戦闘要員を充足するにあつたことが明かである。資治通鑑は「海に浮びて夷州と亶州とを求めしめ、その民を俘にして以て兵を増さんと欲す」と記している。⁽⁴⁾

しかし、これに就ては当時呉国の事情に精通している筈の重臣陸遜が

その兵——虜獲した土人を呉軍に編入した——無くとも、衆を虧くに足らず。いま江東の見衆、自ら事を図るに足れり

と断言しているのを見ると、当時の呉の实情は、必つしもこの遠征を敢行してまで兵員の不足を満さねばならぬ程、逼迫していたとは考えられないのである。

以下は、孫権が夷洲・亶洲を目指して海上を探らせた意図が奈辺にあつたかを、改めて考察してみようとしたものである。

二

孫権の企てた遠征の目的地は、権の伝に

海に浮んで夷洲および亶洲を求む

とあるが、陸遜伝には

権、偏師を遣はして夷洲および珠崖を取らんと欲し、みな以て遜に諮る

とあり、陸遜の上疏にも

珠崖は絶險にして、民は禽獸のごとし

とみえ、全琮伝にも

権、まさに珠崖および夷洲を囲まんとし、みな先んじて琮に問う

とある。仍ち孫権伝には夷洲・亶洲とあるのに対し、陸遜と全琮の伝には珠崖および夷洲とあって、一致しないのである。

これに就て市村瓊次郎博士は、亶の音が前漢武帝が瓊州島に朱崖郡と共に設けた儋耳郡の儋と通づること、瓊州島には唐代に儋州が置かれ、明・清代にも同様であったことより、三国時代に瓊州島が亶洲の名称で呼ばれても怪しむに足りないこととされ、更に瓊州島の二郡は前漢昭帝に廃止せられ、このとき孫権が回復を図っても矛盾しない状態にあった等の理由により、亶洲は瓊州島であると断じられた。⁽⁵⁾ 博士の説に従えば孫権遠征の目的地は、夷洲（台湾）と亶洲（瓊州島）である。

しかし、瓊州島は漢武帝によって儋耳・朱崖の二郡が置かれて、直接漢の統治するところとなつたので、土地の事情は知られていた筈であり、陸遜が「珠崖は絶險にして、民はなほ禽獸のごとし云々」と言っているのは、それを裏書きするものである。ところが亶洲は孫権伝に

亶洲は海中に在り。長老、伝へ言う「秦の始皇帝、方士徐福を遣はし童男女数千人を將いて海に入り蓬萊の神仙および仙薬を求む。この洲に止まりて還らず、世々相ひ承けて数万家あり」と

とあって、東海に仙薬を求めた徐福の一行が漂着して住みつき、子孫の繁栄していると伝へられた島となっている。また更に続けて

その上の人民、時に会稽に至りて貨布する者あり。会稽の東界の人の海行し、また風に遭ひて流移し、亶洲に至るものあり

などともあって、三国時代には亶洲は正式には未だ中国人の足跡を印しない処であり、徐福一行云々の話が伝へられていることなどとも、一たびは郡が設けられ既知の土地である瓊州島とすることはできないと思う。

孫権と陸遜および全琮の各伝が、同一事件に関する記事であるのに、目的地の名称を異にしており、亶洲が瓊州島を呼んだものでないとするならば、孫権の目指したところは夷洲、亶洲、珠崖であって、諸伝の地名が一致しないのは、記事が詳細を欠いていたものと、考えざるを得ない。

夷洲は台湾であり、珠崖が漢の朱崖郡で瓊州島（海南島）であることは疑いない。亶洲はどこに当てるかに就ては諸説があるが、原田淑人博士の亶に *tan, dan* の音のあることより日本書紀・天武天皇の条にみえる多禰の *tane* より生じた名称とされ九州の南部および薩南諸島を一括した位置に当てられた説に従いたい。地名（多禰）は唐書・日本伝の多尼で、遣唐使が南路をとるに至って、夜久（屋久島）などと共に、屢々見える島名である。

このように考えてみると、権の派遣した呉軍は、中国人未踏の亶洲・夷洲と未知の島を探り、既に雷州半島の合浦・徐聞よりの途は知られていた珠崖を海上より目指したことになる。してみれば三島は、相互に方位もあまり異はず距離の点でも甚しく隔絶してはいない、即ち比較的近接したところに在ると予想されていたのであろう。亶洲については会稽方面との交渉が、交易や漂流などであったとされているのであるから、結局は予期に反して所在絶遠で達し得なかったにせよ、遠征の当初には、大陸ともあまり遠距離に比定してはいなかったのであろう。孫権にしても、成功率の極めて低い無謀に近い遠征を、国家多事の際に敢てすることは、考えられないからである。

三

孫権が夷洲・亶洲を、呉の東方あるいは東南方に比定していたとすれば、前漢以来、楽浪の海中に在りと知られていた倭人の住む島嶼は、どのような位置に想定されていたのであろうか。三国時代の倭人に関する知識は、三国志・魏

志の倭人の伝によって推察することができる。しかし魏志の記事には、魏・景初三年（二三九、呉・赤烏二年）に洛陽に到着した邪馬台国の使者によって齎された知識や、その後の兩國の使者の往復によって増した知識も材料になっているのであるから、使者の到着に先き立つこと九年、西紀二三〇年に行われた孫権の遠征当時の倭に関する知識を、魏志より推察することが不当であることは明かである。してみれば、権の遠征決行当時の知識は、以前より継続されたものである筈であるから、後漢時代のものであろう。後漢代の知識を伝えるものは、後漢書・東夷の倭の伝である。

しかし、三国志より後れて劉宋の代になった後漢書は、良史の誉れ高い漢書と三国志の間にあって、史書として評価は必ずしも高くはなく、とくに倭の伝が魏志に拠ったものであることは明白である。魏志・倭人伝と後漢書・倭伝との記事の岐異を論じられた内藤虎次郎博士は、後漢書をもって光武・建武中元二年および安帝・永初二年の朝貢の記事は、范曄が魏略より取り補ったもの、他は魏略の文を殆ど其のままに取り用いた三国志に拠る、と断じられた。

してみれば、後漢書の倭に関する部分は、二回の貢献のそれを除いては、一部を魏略に、多くを魏略に拠った魏志にとり、それに漢書・地理志にみえる東鯢国、および三国志・呉志・孫権伝の夷洲・亶洲（後漢書には亶を澶として）に関する記事を附け加え、三国時代の事実を後漢代に合はすべく、不手際な改削を加えたに過ぎないので、倭に関しては明かに二等史料であるに止まり、したがって、載するところの内容は、三国時代——それも西紀二三〇年以後——の知識ではあっても、後漢時代のそれではなく、これを以て孫権の遠征当時の知識を推察することは、大きな過ちを冒すことになる。

しかし、魏志・東夷（夫余・高句麗・東沃沮・挹婁・濊・馬韓・辰韓・弁辰・倭人）伝は、同書の烏丸・鮮卑伝が「その習俗は前事漢紀を撰びし者、すでに録して之を載せり。故に但漢末魏初以来を挙げて以て四夷の変に備う」と言ひ、習俗のごときについては全く載せていない——したがって魏志には魏書による詳しい註がある——のに対し、

「諸国を周観し其の法俗を采るに、小大区別各々名号ありて詳記するを得べし……故に其の国を撰次して其の同異を別ち、以て前史の未だ備わらざる所に接す」として、習俗などに就ては極めて詳しく述べている。おそらく魏略が魏書などに拠ったのであって、その点烏丸・鮮卑の場合とは明かに違っている。この東夷伝にみえる習俗などは、本来三国時代以前をも扱っていた魏略・魏書などに拠ったもので、三国時代以前よりの知識をも含んでいるのである。

西紀前二〇八年の楽浪郡の開設によって倭人の中国との通交が始まったが、後漢代を通じて遼東方面の政治情勢の変化に伴って、盛衰消長や一時的な断絶は勿論あったにせよ、倭人との交渉があった以上、知識も次第に増加した筈である。光武帝が奴の土酋の貢獻に対して封王を以て報いたことなど、ある程度の倭人に関する認識が無くしては、到底なされることではなからう。後漢書・東夷伝の初めに

建武の初め復た米りて朝貢す。時に遼東太守祭彤、北方を威讐しければ声海表に行はる。是に於て藏緡・倭・韓は万里朝献せり。故に章和己後は使聘流通せしも、永初に逮り多難にして始めて入りて寇鈔せり。桓・靈、政を失ひければ漸く滋蔓しぬ。中興の後よりは、四夷来賓す。時には乖畔するありと雖も、しかも使駅は絶えず。故に国俗風土、略記するを得べし

とあるのは、後漢代の東夷諸族の伝を記すに当って、かなりの史料の存したこと、従って彼の自信をもうかがはれるので、空言ではあるまい。氍毹は南蛮、西羌、西域、南匈奴の諸伝についてもみても、いづれも後漢代の史料に拠り、無責任な態度はみられない。⁽¹⁰⁾ おそらく倭の伝を著すに当っては、魏略および魏志に、後漢代の知識と認定して差支えないものがあると判断し、取ったのである。しかし、その方法に於ては拙劣な点があり、⁽¹¹⁾ 為に魏志の二番煎じの感を与えることは否めないとしても、決して模倣改竄とを以てして後世多数の読者を瞞着し得る、と考えたのではないからう。彼の後漢書の編述に際しては多数の史籍が渉猟された⁽¹²⁾ であり、東夷伝のみが編するに当って非良心的に安

易な態度を以てなされたとは、信じられない。後漢書の倭の伝の史料としての価値は、魏志に拠っているにしても、二回の遣使の記事はもとより、他の部分も、後漢代の倭に関する知識として認められるか否か、に懸つていよう。その判断の如何によって、たとへば後漢書が魏志に拠り、従って新奇な史料が無くとも、中国に於ける三国時代以前の倭に関する知識を知ることができると考へられる。

漢書・地理志の伝へた倭に関する極めて簡単な知識と、三国志の詳細なそれとの間の空白をうづめるものは、後漢書の倭の伝を差置いては、外には無いからである。

四

魏志には倭人の居住する島嶼の位置について其の道里を計るに会稽・東冶の東にあるべし

と想定しているが、魏志に拠った後漢書は

其の地はほぼ会稽・東冶の東にありて、朱崖・儋耳と相ひ近し

としている。魏志が倭人の住地を、会稽郡（江浙地方）東冶県（福建・閩侯）の方面に推定した根拠は、前掲の文章の前に

男子は大小と無く皆黥面文身す。古へより以来、その使ひの中国に詣るもの皆自ら大夫を称せり。夏の後なる少康の子は会稽に封じられて断髪文身し以て蛟竜の害を避けたり。今、倭人の水人の好んで沈没して魚蛤を捕うや、文身亦以て大魚水禽を厭せり。後、稍々以て飾りと為る。諸国の文身各々異なりて、或ひは左にし或ひは右にし、尊卑差有り。其の道里を計るに云々

とあって、倭人の間に盛んであった文身の風俗にあったこと、この文章の構成上明かである。太平御覽にみえる魏志

には、男子は大小と無く皆黥面文身す、に続けて「其の旧語を聞くに自ら太伯の後なりと謂う」⁽¹³⁾とあり、魏略にも同意の文があったことが明かであるが、これあつて始めて、古くより来朝した倭よりの使者が皆大大という中国の身分官職を名乗ったということの意味が了解されるのである。周の一族である太伯が、孝道を全うする為に、弟の仲雍と家を棄てて南の荊蛮に蒞り、文身断髪して呉を建てたのは有名な話で、太伯と倭人とを文身という特殊な風俗によつて関連づけ、倭人の住む島嶼も江浙地方の東方に比定したのである。

後漢書に、倭人の住地を会稽東冶の東方に在るとするとともに「朱崖・儋耳と相ひ近し」としたのは、魏志に、「其の道里を計るに当に会稽東冶の東にあるべし」に続けて

其の風俗は淫ならず。男子は皆露紵、木縣を以て頭に招く。其の衣は横幅にして但結束相ひ連ね略縫無し。婦人は被髪屈紵、衣を作すや単被の如くし、其の中央を穿つて頭を貫きて之を衣る。禾稻紵麻を種え蠶桑緝績して細紵縑縣を出す。其の地は牛馬虎豹羊鵲は無し。兵は矛楯木弓を用う。木弓は短下長上、竹箭あるひは鉄鏃あるひは骨鏃なり。有無するところは儋耳・朱崖に同じ

と、あるのに拠つたものであることは明かである。

それならば、倭人の住地を会稽・東冶の東方にあつて、さらに朱崖・儋耳とも近接しているという推定は、范曄が魏志の文を改めた結果おかしな過ちであつて、後漢代には全く考えられていなかったこと、であらうか。

倭に関する知識が、邪馬台国との交渉によつて豊富になつたことは確かであるが、それ以前にも無つたと考えることはできない。楽浪郡の開設にともなつて始まつた直接、または郡を通じての貢献などにより、あるひは郡と住地を接していた韓族よりの伝聞によつても、知られたものがあつた筈である。

元来、中国人の間に文身の風などは無く、春秋時代に呉・越のごとき越人系統の民族に行われたものである。呉太伯や帝少康の庶子が文身した話は、江浙方面の蛮が国祖を周の一族や禹の裔としたために作爲したもので、中原の人

士よりみれば極めて特異な風俗であり、したがつて深い関心をもつたのである。魏志・韓伝に、「男子には時々文身するものあり」とあり、辰韓の条に「いま辰韓の人、みな偏頭。男女の倭に近きもの亦文身する者あり」とある。後漢書の韓伝が、「其の南界は倭に近く亦文身する者有り」弁辰について、「其国は倭に近し、故に頗る文身す」とあるのは、これまた魏志に拠つたものであらうが、倭人の文身とともに韓族の一部にも文身の行われていることを注意しているのである。魏志・韓伝の弁辰の条には、倭人は韓人・濊人とともに辰韓より出る鉄をもとめて活動していた——鉄は売買に錢の役割りをはたしていた——ことがみえる。倭人の南鮮との交渉は、はるかに古く遡るであらうし、老岐・対馬を経て半島に渡り活動したこともあらう。倭人の間に文身の風が盛んであつたことなども、三国時代に至つて始めて知られたことではなからう。

してみれば、文身の風を以て呉太伯のそれと関連させ、倭人を太伯の裔であらうとして、居住する島嶼を江浙地方の東方に比定したことも、三国時代以前、すくなくも後漢時代には成立していたであらう⁽¹⁵⁾。

また、倭人の島嶼を以て儋耳・朱崖と近接しているという後漢書の文は、前掲の魏志の倭人の衣服、生物、武器等について述べて「有無する所は儋耳・朱崖と同じ」とあるものを勝手に改めたものであつて、内藤博士は、「三国志の文は「所有無」即ち風俗物産の儋耳朱崖と同じきをいひ、其下に風土を記せる句を続けたるを、後漢書には位置の意義と変じたり。是れ改削の際に起れる疎謬なり」と説かれ、榎一雄博士は「これは魏志の文章を敷衍して、倭が南方にあることを強調したものとされた。たしかに魏志の文面は瓊州島と比較して類似をあげるに止まり、位置の問題には触れていないが、范曄が「相ひ近し」と判断したのは、当時の考えを誤り伝えているであらうか。瓊州島は前漢の武帝が収めてより、この地の風土、物産の北方と著しく異つてゐることは注意をひいたとみえ、それに関する記事は、漢書・地理志・粵地の条にみえる。魏志は倭との距離の点には触れていないが、両処の關係は漢書・地理志の粵地の条に黄支国について、単に「民族は略珠崖に類す」とあるのなどとは違つて、近距離に在ることを寓している⁽¹⁸⁾。

のではないか、と思われる。倭人の住地は「温暖にして冬夏生菜を食し、皆徒跣す」というように、著しく南方的に伝えられた結果、衣服、生物、産物、武器等に就て知られるに従って、前漢以来知られている儋耳・朱崖のそれに酷似していると感じ、漢書・地理志・粵地の条の儋耳・朱崖の文を取ったのであろう。したがって漢書・地理志の文に拘束せられて、事実を誤り伝えた恐れなしとは言えないのではないかと考えられるが、いづれにせよ両処が多くの点で甚しく類似しているとの判断の上に立ってなされたのであって、距離的にも近接していると考えたのではないか、従って後漢書が倭人の住地を、朱崖・儋耳と相い近し、と記したことは、誤った判断ではないと考えるのである。⁽¹⁹⁾

倭の事情が次第に知られるとともに、文身の風俗などによって、倭人太伯後裔説がつくられ、その住地も江浙地方の東方に比定され、また倭の風俗、生産、生物、武器などまでが、南方の色彩濃厚に伝えられたために、更に居住の島嶼は会稽・東冶の東より儋耳・朱崖の近くにまで散在する、と推定されるに至ったのであろう。

東シナ海と太平洋とを別って、九州より台湾まで弧をなして連なる大隅諸島、薩南諸島、琉球列島等が、まったく中国に知られること絶無であった、とは考えられない。たとえ正式の交渉はなくとも、東鯤国とか夷洲・亶洲などのことは、ときたま海濤を押しきって会稽方面に交易に來った勇敢な島人や、漂流民などの談話によって、断片的にはあっても、伝えられていたのであろう。原田淑人博士は、我が国出土の呉鏡の輸入経路について種子島——白鳥博士は亶洲とせられた——の遺跡の発掘の結果などより、南方の貿易路の存在に就て述べておられる。⁽²⁰⁾

現行の地図で、中国大陆の海岸線や東支那海に浮ぶ諸列島の位置を念頭に置いて、東鯤国、亶洲、夷洲、または神仙の住む三島などを、そのままに配当して、中国での三世紀初頭の知識と考えることは不可能である。時を異にし断片的に伝えられた知識の集積では、東方の海域には、以上の島嶼が散在していること、そして倭人の住む島嶼も、それらとほど遠からぬ距離に在ると、推定していたのであろう。

五

倭人の住む島嶼を

朱崖・儋耳と相ひ近し

とする判断が、後漢の頃に既に成立していたとすれば、孫権が船隊を派遣して海上より

珠崖および夷洲を囲まん

とした意図が奈辺にあったかも、自から推察されよう。

海上より夷洲や亶洲を探って朱崖にも達しようとする権の念頭に、その近くにあると考えられていた倭の島嶼が、まったく無ったと考えることはできないからである。後漢の初期、すでに使者を洛陽に遣わして王とせられた強力な土酋の住む倭への接近を考えなかったとすれば、むしろ不思議である。

孫権が強大な魏に対抗すべく、東方より牽制せんとして、遼東の公孫氏や高句麗のごとき勢力と執拗に連携を図ったことは、改めて述べるまでもない。彼は帝号を称した黃武元年(二二二)四月の翌月には、早くも張剛・篤管の二人を遼東の公孫淵のもとに遣わしている⁽²¹⁾のであり、亶洲・夷洲への遠征は実にその翌年、重臣の反対を却けて行われたのである。これを以てしても、単に兵員充足の爲めのみ、などと解することはできないであらう。

孫権の東方勢力接近の意欲に危惧の念を懷いた魏は、遼東に向った呉の使者を山東半島の成山角に要撃して妨げたり、一たびは呉に帰服した公孫淵が、態度を一変して魏に附くと、楽浪公に封じたりして懐柔したのである。このような魏が、孫権が帝号を宣するや早々にして敢行した夷洲・亶洲遠征に無関心であった筈はなからう。遠征の結果は失敗に終りはしたものの、これを以て権の東海の島嶼への接近の意欲が消滅したとは考えられなかったであらうから、警戒の念は去らなかつたに相違ない。

たまたま公孫淵を斬つて遼東および楽浪・帶方二郡の地を回復した結果、魏の景初三年（二三九）に倭の有力な土酋卑弥呼の使者が洛陽に到着した。孫権の夷洲・亶洲遠征に後ること十年にして行われた卑弥呼の貢獻が、呉の倭への接近を危惧していた魏にとって、欽慕を以て迎えられたことは当然であろう。卑弥呼に与えん詔書に、「汝の在るところは踰かに遠きも、仍ち使ひを遣して貢獻す。これ汝の忠孝なれば、我れ甚だ汝を哀れむ」と、最大級の慰勞褒辭を連ねるとともに、「汝は其れ種人を綏撫し、孝順を為せ」と、魏に対する忠節を命ずること怠りなく、王に封するに親魏倭王という、頗る明確に魏に親附することを現わした王号を以てしたのである。⁽²²⁾

思うに三国時代以前、後漢時代には既に形成せられていた倭人の島嶼の所在に就ての想定は、呉の孫権の海上探險となり、ひいては魏の卑弥呼封王にまで影響したのではなからうか、というのが本論の主旨である。中国の倭人の居住地の認識も、やがて大和の政府によって行なわれた四世紀後半の半島での交戦とか、五世紀のいわゆる倭の五王の南朝との交渉などによって、当然大いに變化したのであらうが、それは今ここで触れるべき問題ではない。

（昭和四三・八・一一〇）

註(1) 三国志・呉志・卷二 孫権。黃龍三年の条

(2) 三国志・呉志・卷五八 陸遜

(3) 三国志・呉志・卷六〇 全琮

(4) 資治通鑑・卷七一 太和四年の条

(5) 註(2)に同じ

(6) 「唐以前の福建及び台湾に就いて」支那史研究・三三

二—四頁

(7) 松下見林は熊野に徐福の墳と祠とがあるのを以て、夷洲とともに——後漢書・倭の伝が夷洲をも徐福流移の処としたのに誤られたのである。後漢書に因ったことは寛

を源とすることで明かである——みな日本海島を指す、とし（異称日本伝・卷上一）、那珂通世博士は沖繩島を指すか、とされ（外交釈史・卷之三、第二十五章・徐福）、

和田・石原両博士は済州島であらうかとした（岩波文庫・魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝）

(8) 「徐福の東海に仙薬を求めた話」東亜古文化論考・一〇三—四頁

(9) 「卑弥呼考」本文の撰撰、現代のエスプリ・第六号・日本国家の起源・三二—七頁

(10) 南蠻・西羌の伝は、後漢代の忠実な記録として貴重で

ある。南匈奴伝は名称の示すごとく南匈奴に関する記録であるために北匈奴に就て疎であるのは止むを得ない。

また南匈奴に關しても後半は、単于名と繼承關係の羅列に止まってしまうが、南匈奴の無力化と鮮卑族の抬頭によって、後漢政府にとつて重要問題でなくなったため、必ずしも編者を責めることは当らないであらう。西域伝に至つては班勇の記すところに拠り頗る精密確實である。一例を上げれば、条支國の条に安息の西界にあった于羅國を、安息國の領内としている点など、後漢代の現地の実情を誤りなく伝えていること、白鳥庫吉博士の研究で明かである。「大秦國及び拂菻國に就きて」一・漢魏時代の大秦國、西域史研究・下一七四—五頁

(11) 註(9)三六—七頁

(12) 趙翼「陔余叢考」卷五・後漢書撰述家最多

(13) 太平御覽・卷七百八十二・四夷部三・東夷三・倭

(14) 倭人、自ら太伯の後なりと謂う、の文が魏略にあったことは、通典の分注によつて知られていたが、更に翰苑の殘卷にみえる魏略の逸文に存することによつて確實となった。末松保和博士「太平御覽に引かれた倭國に關する魏志の文について」日本上代史管見・三一—七頁

(15) 橋本増吉博士は、分野説より倭人の住する山島を、長く南に延びた列島で、会稽・東冶の東にあったと認めていたことは、實に魏の時代ばかりでなく、少くとも漢代以來の地理的常識であつた、とされた。改訂増補・東洋

史上より見たる日本上古史、四九頁

(16) 註(9)三八頁

(17) 邪馬台國・第三章・邪馬台國の位置(二)八五—六頁

(18) 橋本博士は、魏志の倭の衣服、生産、生物、武器等の記事の漢書・地理志の僭耳・朱崖郡のそれに拠っていることより「僭耳・朱崖ともまた漳からざるものなるべきを思ひ、遂にはその風俗習慣も亦之れと類似のものとして、それ等の記事を流用するに至りしものではないか」と説かれた。東洋史上より見たる日本上古史、三五—五頁

(19) 大森志郎博士は、倭が「朱崖・僭耳と相ひ近し。故に其の法俗多くは同じ」という後漢書の文は、魏志の記事の無責任な拡張解釈であるとの説に反對されて、魏略において、海南島は日本列島の近くにありと考へていたが、行文にそれがあらわれなかったまでであらうとされ、この文については後漢書の方が魏志より魏略の本文を忠実に伝えているのではあるまいか、と説かれた。魏志倭人伝の研究、第三章・会稽・海南島との比較の意義・六一—二頁

(20) 「魏志倭人伝から見た古代口中貿易」(聖心論叢・第一九集)

(21) 三国志・呉志・卷二 孫権。黃武元年の条

(22) 拙稿「親魏倭王考」史苑・二三卷二号